

(2018年10月11日講演)

## 6. グローバル化と資本主義の精神間の相克 (一つの原理論の試み)

一橋大学 名誉教授 寺西重郎委員長

今日話すことは結局、配った中央公論の本も、ある意味で原理論を作ろうとした試みである。面白くないというか理屈っぽい原理論の話で申し訳ないが、グローバル化と資本主義の精神あるいは文化というものの関係について今私が考えていることを少し話したいと思う。

全体は4つの節からなる。最初の節には堅苦しい概念的枠組みがある。2番目の節には、social levelにおけるbeliefの、あるいは信念の変化が、資本主義の発生の契機になったという命題をこの枠組みの中で考えている。3番目の節が、西洋と日本の経済成長ということで、信念の変化を契機に稼働された成長という枠組みの中で資本主義が形成されてきたのだということを話す。4番目の節では、3番目の経済成長を受けて行動様式ができてきたこと、しかも、それが規範性を持ってきたということを書いて、最後に、一応結論的なものと、それから残された問題としてマクロをどう考えるかについて話したいと思う。マクロについては本では全く触れていないが、この辺もいろいろ意見を頂けたらと思う。

それでは、まず問題の所在である。第一に、日本を含むいくつかの国では西洋の近代資本主義が伝播する以前に固有の資本主義的経済発展があったのではないかということ、第二に、そこではそれぞれの文化に固有の行動様式があったのではないかということを書く。固有の行動様式と資本主義は文化の変化によって生まれたというのは少し言い過ぎで、資本主義が文化から生まれたなどと言ったら、とんでもないと言われるが、契機というか、関連して生まれたということではないかというのが今日の話の骨格である。それから、第三に、西洋の近代資本主義の伝播は、西洋の技術とフォーマルな制度を各国に移植した、したがって、技術とフォーマルな制度は世界的に収斂していったが、精神とか文化はなかなか収斂しないのだということが、今日話したいことである。それから、①のところ「日本を含むいくつかの国で」と書いてあるが、私の本の中では中国も入れたが、とてもではないが力不足で、中国はモデルの中に入らないわけではないと思うが、今日の話ではスキップして、日本と英米、あるいは西洋との比較をやりたい。第四に、経済成長が何らかの形でいろいろな行動が起こってくるのだが、その中で各国の資本主義の固有な文化は行動様式を規範化し、世俗倫理化した。さらに、制度へ埋め込まれていって、そこからそれぞれに固有な行動規範(精神)のようなものが生まれてきたことを論じたい。だから、ウェーバーが言っている精神というのは、この第四の話題に関わっている。ウェーバー自体が、プロテスタンティズムの精神から資本主義が生まれたなどとばかげたことを考えるのでは

ないと、その本の中で二度ぐらい言っている。だから、ウェーバーの言う資本主義の精神、あるいは行動規範というのは、成長の中から、資本主義の中から生まれてきたものだと理解するのが一番よいのではないかと思う。各国のそのような精神とか行動規範の調整が今後のグローバル資本主義の課題ではないかというのが、私が今一番考えていることである。

この前どなたかの話のときにゴードンの『THE RISE AND FALL OF AMERICAN GROWTH』について話をしたが、結局ゴードンの本は、アメリカが作った文明、簡単に言うと西洋の技術的発展の上に作られた工業社会に時短と省エネという生活様式の変化を組み込んだものだと思う。ゴードンは、そのような文明の消長がもたらした生活様式の変化に限りない愛着を持って、一種叙事詩的にその衰退を嘆いた本だと思う。突き詰めて言えば。

私がこの第五の論点のところで結論的に申し上げたいことは、これからの資本主義はアメリカ文明が提案した生活様式の代替物をどう考えるかということが大きな問題になるということである。アメリカ文明は西洋が引き継いできた文化とそこから生まれた精神あるいは行動規範から出てきたものだと思うが、それがどのようになぜ衰えて行きつつあるか、という話は別にして、そういうアメリカの文明が提案した生活様式に取って代わる生活様式をどのようにして提案するのが各国の課題であるし、日本の課題でありまた、これからの課題ではないかということ最後に少し話したいと思う。

時間がないので、まず (1) の概念的枠組みに行きたいと思う。文化については、最近論文が結構出てきて、経済学における文化の定義は大体定着したようである。幾世紀にもわたって人種的・宗教的・社会的グループの間であまり変化することなく受け継がれていく **belief** と **preference** とか **value** の体系である、というのが最近しばしば用いられる定義である。**preference** とか **value** についてはあまり議論されることはないのだが、グライフや、私が最近注目しているモキアは、**belief** の変化を非常に重視している。グライフの『Institutions and the Path to the Modern Economy』というタイトルの中で、「**cultural belief**」という言葉が出てくるが、**belief** には 2 種類あり、**internalize** された **belief** と **behavioral belief** があると、彼は、マグリブとジュノヴァで **cultural belief** が違うということが問題なのだということを行っているわけであるが、私が日本のことを考える場合、どちらも独立した個人の **behavior** を前提とした **belief** である。やはりそこら辺は少し不十分で、**Social-level** の **belief** という見方がある程度必要なのではないかと思う。社会的にある種の信念、社会や経済を考える考え方が変化するという視点が重要なのではないかということが、後で話したいことである。

2 番目に、制度についてだが、制度についてはここではあまり話さない。私は文化について話す、その中でいろいろ出てくる制度と文化との関係が非常に重要であるから少し話しておく、ダグラス・ノースは、よく知られているように社会の人々がゲームをするときのルールが制度であると言った。だが、グライフは、「ノースの定義はおかしい」と言って“けち”を付けた。どこがおかしいかというと、ゲームのルールと定義しただけならば、

そのルールは単なる指示とかインストラクションでしかない、それに従うための動機付けがない、そういうものは制度とは言わない、とグライフは言うわけである。グライフは自身の著書の中で、社会的行動に一定の規則性を与えるルール、**belief**、**norms**、組織からなる体系の均衡状態という難しい議論をするが、要するに均衡として制度を考えるという主張である。均衡であれば、その均衡に到達下時点で皆が満足して主体的にも均衡しているから、その均衡からデビエートしようとするインセンティブを持たないと、だから皆その社会的な均衡に従うのだというのがグライフの考え方のエッセンスである。

ただ、このグライフの議論には少し問題なところがある。一つは、ノース批判について、ノースはどちらかという政府が作った制度について所有権とかそういうことを議論しているので、政府が動機付けのために多大な費用を支払って、制度に従うようエンフォースすることもやるのだという前提がある。だから、定義がおかしいということはよいのだが、ノース批判にはちょっと行きすぎの面がある。もう一つ、グライフの問題点は、システム「体系」という言葉を書いているが、体系の中に「**norms**」という言葉が入っているが、だが、日本の場合は、私が思うには、**norms** あるいは道徳とか **ethic** というものによる動機付けが決定的に重要なのではないかと思う。その点をグライフが無視していることは少し問題ではないかということが、ここで少しコメントしておきたいことである。

3番目の議論では、行動規範が、ウェーバーの問題に持っていく場合に問題になる。このような議論の下では、文化はどういう役割を果たすかという、文化は **belief** と **preference** からなる。**belief** というのは一種の制約みたいなもの、人々の考え方の基本である。相手がどう行動するかとか、周りの人々はどう行動するか、あるいは社会をどのように考えたらよいかというものである。**belief** を所与として、あるいは制度のさらに制約の中に入れておいて、そのバリュー **preference** をいわば効用関数の最大化のような形で最適化することから人々の行動が出てくるわけであるが、グライフの定義したような制度があると、その制度が非常に利いてきて、人々の行動が規則性を持つというのが、グライフが主張していることである。さらに言うならば、グライフは言っていないが、規則的な行動は社会でそれぞれ、ある程度政府が成熟している社会ではできてくると。その規則的な行動が人々にとって、成長の有効性などによって、人々がそれでもって受益し、何らかの成果を享受するような場合、人々が規則的な行動を、「これは悪いものではない」と言って支持する考えが起こってくると思われる。その場合、次第にそれぞれの社会で **belief** と **preference** から出てきた行動様式はだんだん規則性を持ってきて、さらには規範性を持っていくと。それが行動規範や精神と私のレポートで呼んでいるものである。ウェーバーの「精神」はやはりこうやって出てきたものだと見るのが一番適当だと思われる。

それでは、第2節に行きたいと思う。**Social-level** の **belief** の変化が非常に重要なのではないかとモキアが言っている。これが西洋における資本主義の発生の契機になったという議論である。西洋においては自然を人間のために用いるという人間中心主義 **Anthropocentrism** が出てきたことが西洋に資本主義をもたらし、経済発展をもたらした根

幹にあるという。そうした主義はどうやって出てきたかという、一つは非常に思想的な面があり、デカルトというのは17世紀の初めの人だと思うが、自然の法則は昔アリストテレスが言ったように内在的にあるものではなく、その自然を作った神の意志によって自然の法則が与えられた、**imposed upon the universe** 神によって与えられたものであるという議論をデカルトが始めたのである。その後、ロックはさらに自然法における神の意志の中の何が大事かという、人間を大事にする、保全することであるという議論をしたわけである。ベーコンはさらに、自然を研究するのだが、自然の研究はそのような神の意志、あるいは神の賢明さを明らかにすることが目的なのであり、それは非常に強い宗教的な意味を持つのだと考えたのである。神の栄光、神の賢明さを明らかにし、自然を研究して、いかに神が素晴らしいかを明らかにすること、神の賢明さを明らかにすることが神の栄光に寄与することになると、そういう主張である。モキアは、ベーコンを題材の中心においてそういう議論を展開するわけである。こうして自然に対する人間中心主義が出てきた。そこから神は人間が自然を利用して、その人間の厚生の上昇に用いることを望んでいるのだという観念が出てきたのだというのがモキアの主張である。1500年、この前後にコロンブスが新大陸を発見し、1700年、これはニュートンのプリンキピアが出てくる3~4年前であるが、その200年の間にこういう信念の変化が起こったのだというわけである。社会的に人々の自然に対する考え方の変化が非常に宗教的な動機付けを持ちながら起こった。それが科学技術の工業への応用という意味での技術進歩をもたらし、それが西洋の資本主義を始動させたというのがモキアの議論なわけである。

これに対して、日本についてどう考えればよいかという、日本ではこのような自然を「実験によって」拷問「し利用するという考えは全くなくて、自然の中に抱かれて、その中で生きるものであり、自然を利用するなどという考えは一切なかったと思われる。日本では、社会が進化していく中で道徳あるいは **ethic** が非常に不安定になっていく過程の中で、信念ということ言うと、新しい社会を統べる新しい道徳律がなければ、日本の国と社会は滅びてしまうのだという危機感、新しい道徳律が必要なのだという危機感が日本の鎌倉期から戦国期にわたって次第に生まれてきたというのが私の仮説である。そこは皆さん文句があるかも分からないが、その辺を聞きたいと思う。

どうしてそういう仮説が生まれてきたかという、平安時代の末期に律令制が滅びて武士が出てきて、貴族にとって、自分たちがいままで支配してきた社会がなくなるという大変な時代が平安末期には起こってくるわけであるが、そういう中で戦乱が起こってくると、大衆救済、大衆が仏教的な救済を求めてくるという状況が起こってきたわけである。それに対して、鎌倉新仏教と言われる新しいタイプの仏教が、大衆を救済するためには、皆を寺に呼んで、そこで修行させるということでは到底実行できない、全員を救済するために寺に呼ぶことはできないし、しかも大衆は皆貧乏で一日中働かなければいけないから、寺での修行のために時間を割くことはできない。ということで易行化がなされた。鎌倉新仏教による易行化、仕事をしていてもよいのだと、仕事をしながら念仏をずっと唱えて自分

が新しい悟りを開くことができるように常に願っていればよいのだというような理論で、宗教上の改革をやったわけである。これが非常に大きなインパクトを持ったというのが私の考えである。これは網野善彦氏などがよく言っているが、鎌倉時代になって南北朝時代にかけて職業的求道、皆が道を求める行動をやったのだということに対応している。日常の職業生活の中で信心と善行をやる。これは良い行いをやればそれもブツダに救われるような効果を持つのだというのが回向の概念であるが、それはともかく、そのような宗教変化が起こったために、それぞれの職業を道と見なして悟りを探求するような行動様式が鎌倉時代以降芽生えた。ただ、それによって日本では、ヨーロッパでは考えられないぐらい社会的分業が急進展する。「それぞれの道々の輩」という言葉を網野善彦は使っているが、何でも専門家になるわけである。踊りでもよい、能でもよい、何かを造るのでもよい、何でもよいから専門家、社会的にみるとヨーロッパでは信じられないような分業化・専門化が起こってくるわけである。経済学的に言うと、それは社会的分業が急進展したということになると思う。そうすると、人々はいろいろな意味で異なった生活を行って、他者関係が複雑化してくる。だが、当時仏教が持っていた（基本的にインドから持ってきた）道徳律は、そのこととは無関係で他者関係などの考慮は全くない道徳律であった。それによって他者関係が非常に混乱するわけである。仏教の道徳律というのは、皆が寺に入って修行する場合に、それによって悟りを得るために修行する場合にどういう行動を取ればよいかという道徳律で、市場経済あるいは社会的分業が発達した、社会の同質性がどんどん壊れていくような社会では全く通用しない。

そういうことがいろいろあり、私の判断では、室町・戦国の混乱は、社会的分業がどんどん進んでいく中で、人々は専門化をどんどん進めていく、社会もそのように変わっていくのだが、その中での人々の行動様式は付いていけないということが一つの大きな理由になって戦国時代に突き進んだのではないか、というわけである。

そして、一揆がいろいろ起こるが、特に有名な一向一揆などはシェアの思想である。シェアするというのは、市場経済でいろいろな良いことがあるとそれを皆シェアしていこうという考えであり、それは社会的分業による経済発展を全く否定する考えであった。戦国大名はとんでもないことだと思ったし、信長などは烈火のごとく怒ったのだと思うが、そういうものが起こってくる。要するに、十分な道徳律が欠けていたのが、室町幕府の作った社会であり、そこには猜疑と讒言と中傷がはびこるとんでもない世界であったのだという論文が幾つも書かれている。

それから、室町・戦国時代は下克上でもまた有名な世界である。これはどういうことかという、勝俣鎮夫氏という戦国法をやられている方が非常に説得的に主張されているのだが縁に基づく自己救済という問題がある。武士も非常に仏教に帰依していくわけであるが、自己救済、自分が悟りを開いていけばよいのだと、武士にとって非常に大事な悟り、いざ死すべきときに自分が救われればよいのだということである。その場合に武士が考えたのは、自分が地縁や血縁、あるいは人々の主従の縁、いろいろさまざまな縁、仏教的な

輪廻の世界で誰に会うか分からない、誰と親しくなるか分からないような世界の中で、縁に基づいて、そのグループの中で切磋琢磨しながら自己救済していくというのが武士の行動として出てきたというわけである。これが勝俣氏などの主張なのであるが、そういうのは、やはり土地をやるから忠誠を尽くせというような封建的主従関係とは全く無関係な考え方である。縁が主従関係であればよいが、そうではない地縁や血縁等々、いろいろなものに結び付きながら人々は、武士も、みんなが自己救済をやっていくわけである。

その結果、封建制度が非常に機能不全に陥ると。結局人々は、長期にわたる戦乱の中で新しい道徳律の必要と社会的希求に向かっていく、ということが起こるわけである。それが、モキアが自然を人間のために使うという信念が社会に出てきたと言うのに対応するような、日本における信念の変化だったと思われるわけである。

その後、経済成長が日本でも西洋でも起こってくるわけである。ヨーロッパでは16~17世紀、コロンブスからニュートンの間に、自然を人々の幸せのために使おうという科学的な思想が出てきて、それとともに有用な知識の国際的な市場が出てきたと言われているが、18世紀になってくると、それが工業における技術革新になってくるわけである。科学的知識を工業生産に利用するという形で工業の発展が起こる。これが、モキアが去年出版した本で主として言っていることである。工業主導の大量生産大量消費社会が起こってきたということである。だから西洋では **anthropocentrism** の出現という信念の変化によって科学技術の発展、工業技術の発展が起こってきて、それを人々のウエルファに使おうという思想が伴うことによって加速されてきたということがあるわけである。それでイギリスの資本主義、西洋の資本主義ができてきた。

日本の江戸時代はどうかというと、江戸幕府ができた当初から考えていることは、もちろん外様大名をどうするかということで参勤交代等いろいろ工夫していたわけであるが、それとともに戦乱の中で社会秩序、そのための道徳秩序をどう作るかが非常に大事な問題だった。そういう中で江戸幕府がやったことは、武士が率先して道徳の模範となるということで、社会に道徳律を作ることが非常に重要な政策課題になった。そのために林羅山に命じて朱子学を大々的に導入した。だが、朱子学はまさに中国の受動的な世界観、天の理が人にも社会にも利くというような受動的な世界観で、武士は行動と能動の階級であるから、基本的に相いれなかったところがある。そのようなことによって、江戸幕府は何をやったかということ、士農工商という身分制を入れたわけである。これは秀吉から本格的に入れ始めたことであるが、これは社会が非常に社会的分業によって他者関係が混乱してくることをどのようにして防ぐのかが一つの対応だった。江戸幕府ははっきりと士農工商という身分制度を入れて、それぞれにおいて同質的な、他者関係がさほど問題にならない、社会を作ろうとしたのだと思う。その中で職分ごとの通俗道徳のたゆまない開発、江戸の初期には鈴木正三、それから中期には石田梅岩などが活躍したし、後期18世紀に入ってくると二宮尊徳のような人が出てくるが、道徳律が非常に進化してくると、行動様式に規則性が出てくる。そうすると、人々が他の人がどのように行動するかが非常によく分かってく

るわけである。そういうことによって社会の非対称情報が削減される。そうすると、契約作成コストが大幅に削減されるわけである。江戸の奉行所は、北町奉行も南町奉行も何十人かでやっている本当に小さな裁判組織であるが、そうしたものもある意味で要らなくなってくる。道徳が普及してくると契約の **enforcement** コストも削減される。トーマス・スミスとかいろいろな人が言っているが、日本の村落というのは信じられないぐらい少数の役人によって統治されているということが言われている。それから相対済まし令も同じである。奉行所はその人数が絶対的に足りないから、皆で、何事も金銭的なめめ事は相互に、奉行所に持ってこないで相対で済ませてしまえというような命令を何回も出す。これも道徳の普及が関わっているのだと思う。そのようなことがあり、私の仮説は、社会における取引コストが江戸時代になって急激に低下し、商業主導の経済発展をしたというものである。イギリスのように工場などはできない。生産は相変わらず農家の副業、小生産者がやるという形での、だが、商業が取引コストの低下の恩恵の下でそれを大規模にコーディネートして、それによって江戸時代の経済発展が起こったのではないかということになる。

第3節に行くと、江戸時代に起こったような経済発展を「スミスの成長」とモキアは呼んでいて、西洋で起こったような科学技術によるものを「シュンペーター的成長」と呼んでいる。日本で起こったようなスミスの成長は、西洋では工業化を行う前の大航海時代にある程度起こったが、非常に成長率が低くて、西洋ではスミスの成長は全く期待できないものだという議論をするが、これは西洋の特殊事情だと思う。だから、シュンペーター的成長でなければならないと、スミスの成長が駄目だというのは、一般化できない議論だと思う。江戸時代には明らかにスミスの成長が日本で起こった。もちろん、成長率は低かったが。コンピューター時代にもう少し速く行っていれば商業だけでも、Amazon が出てきたりして、もっと高成長が起こったかも分からないが、そうではなかった。成長率は低かったが、しかし成長は江戸時代に起こった。

では、イギリスや西洋ではなぜそのような道徳律や制度による取引コスト低下による成長が行われなかったかということ、2つ理由がある。1つは、西洋では道徳律はもともと神が決めるもので、何が善で何が不善・悪であるかは完全に神が決定した。その後、神が社会的に重要でなくなってくると、その後の西洋の哲学はロールズの方向に向かって動いた。チャールズ・テイラーと言う人が『自我の源泉』という非常に巨大な本を書いて、非常に優秀な人だと私は思うが、主張したことである。西洋の哲学は善についてはできるだけあまり考えない方向に、善は、皆がいろいろな善を持ち出してとんでもない争いになってしまう。できるだけ善について考えないで公正とか正義というものを中心とした社会を作らなければならないという形に西洋の哲学が動いていったというのがチャールズ・テイラーの基本的なメッセージである。その結果が、結局ロールズの正義論にまで行ってしまいうわけである。そういう意味で、道徳律は全く変化しなかった。道徳律の役目が減っていったというのが西洋の文化的変化の一つの大きな特徴だと思う。

もう一つは、同じ啓蒙思想の下で科学技術ができてきたと同じように社会契約が生まれ

てきて、この辺は私ではなく猪木委員に聞きたいこともあるが、社会契約論が出てきたことがある。国家による制度ルールがほぼ同じ時代に非常に大きな話題になり、国家が人々のさまざま争いをホブズ的に仲裁して、神の定めた道徳をエンフォースする役割を果たすのだという方向に社会が動いていったわけである。国家の維持には非常にコストがかかるのだが、まさに大きな国家ができていくわけである。徳川幕府のような小さな政府ではとてもいかない。幕府も各藩も人口の6%ぐらいの侍・武士を抱えていて、それが結構大きかったが、彼らは役人として機能することは全体の労働時間の本当に何分の一かで、残りの大部分の時間は、精神的な指導者として、それからいつ倒幕運動が起こるか分からないから、武術を鍛えることに使われていた。経済的な意味では、日本は基本的に小さな政府で行った。道徳律によって契約とか **enforcement** をやった。これに対して西洋では、道徳律の役割を小さくしていった、国家が **enforcement** するのだということに移っていったと言えることができる。だから、スミスの成長は利かなかったということだと思う。

最後に、経済成長の下での行動様式の埋め込みがどうやって人々の行動の規範あるいは精神を生み出していったか、労働と金融と生産について話したいと思う。

労働については、西洋ではデカルトが例えば機械的人間論を開発する。これはテイラーの本の中にも書いているし、今村仁司氏は、ホブズが最初に機械的人間論を言っていると言うが、ホブズではなくやはりデカルトではないかと私は思う。テイラーははっきりとデカルトが機械的人間論を持ち出したと言っている。神の意志に干渉しないために、いつでも制御可能なように、人間の意志を神の意志のとおり動かすように、デカルトは非常に工夫に工夫を重ねて機械論的な人間論を開発したというのがテイラーの主張である。そういう思想の下で、経済成長の下では神の栄光のために禁欲的な神の手になることをプロテスタントの人々は選択したのだというウェーバーの説にこれがつながるわけである。そこでは、労働はもう全くの商品である。要するに神の手であろうと何であろうと、商品として切り売りできる労働である。

日本ではそうではない。念仏だけで成仏できるという易行化が行われて求道的な職業行動が出てくると、人々は職分ごとに人格陶冶の形で自己救済をしていった。悟りを開いていく過程で、人格に体化された労働ということで、江戸時代に労働が非商品的なものに次第に変化していったと思われる。人的資本の商品化があまり起こらなかったのは、やはりこのような職業的求道行動によって自己救済をやったということが関わっているのではないかと思う。

次に、金融について言うと、ロックは、神は人類の保全を望まれていると言った。ロールズがハーバードで行った経済思想論の非常に素晴らしい教科書が日本でも翻訳されているが、ロールズのロック論によると、自然権としての所有権、神が単に人類の保全のためにある程度財産を持たなければならないのだとロックは主張したという。これはロックの『統治論』の中に確かに書いてあることで、そういう意味でジェントリーなどは所有に非常に金融資産にこだわる階級になっていくわけである。こういう中で経済成長が起こって



くると、18世紀の初めにイギリスで金融革命が起こって、バンク・オブ・イングランドとか証券取引所ができるわけであるが、金融資産を持つことは神の意志を体現した行動なのだ、人類を救うための行動なのだと言うことになってくる。名誉革命以降の経済発展について、ジェントリーは金融資産に非常に深入りして、ロンドンのシティと非常に関係を深める。前回の竹内委員の議論にかかわることだが、ベンジャミン・バーバーという人が少し面白い本を書いている。『消費が社会を滅ぼす?!』というタイトルの本であるが、これも翻訳されていて、その中で書いてあるが、ブッシュ・ファーザーのほうは「投資家は殉教者である」と主張したと書いてある。そのくらい大きな価値で金融市場を評価する観念が出てきたのである。

日本ではそうではなかった。もともとジェントリーは国土の何割も保有する大土地所有者になっていまだに続いているわけであるが、武士はそうならなかった。平安時代に開発領主として武士は出てくるが、すぐそれをやめてしまう。戦闘にかかわる技能者になり、職業的な求道を始める。経済成長が起こってくると、技能継承の方法として「家」を作っていく。この家というのは、律令時代の蹴鞠が上手な人が何家になったり、法律に詳しい人、そろばんのうまい人が何家になったりという形で、技能に関して家が出てくるが、武士はまさに武芸に関して家を作った。経済成長が起こってくるとそれぞれが工商階級が家を作っていくわけである。そういうものが一種のフォーク定理になって、インフォーマルな制度として無限繰り返しゲームによって裏切らないという行動を起こすようになった。このため金融資産の地位はかなり日本では低く代わりに人的資産が重視された。こういうことを言うと、金融論の専門家から「何を言っているのだ」と言われそうだが、日本での銀行中心の金融制度は多分ここに基本的な起源あるのではないかと思う。

最後に、生産であるが、モキアが言うように、西洋だと自然に関する知見を深め、それを人類のために用いるという人間中心主義 **anthropocentrism** が財の生産行動をもたらす。経済成長の下で技術革新が制度化されていく。啓蒙思想の下で、これはハーバマスという情報に基づく哲学を開発している人が言っているのだが、産業革命が起こったのと同じころ起きた啓蒙主義の下で、西洋は完全に認知的合理性へ傾斜していった。合理性というのはもっと審美的な感性を高めるとか、あるいは倫理的な合理性というのがあるらしいが、認知的な方向にこの時代に強く傾斜していったのだというのがハーバマスの主張である。

日本では、自然を何かに使うなどというのはとんでもない話で、私は生け花を趣味でやっているが、假屋崎省吾などがやっている草月流は生け花ではない。単なるアレンジメントである。生け花の本来の姿は、古流とか池坊とかである。この前ある写真で草月流の生け花を見て驚いた。梅が古くなっていくと、白いこけのようなものが付く。苔梅と呼ばれる。それを3本か4本切ってきて、バーッと生けているわけである。これはもう殺りくだと私は思った。假屋崎省吾も同じことをやっている。だが、古流などだったら、命を預かるのだと言って1本をいかに美しく生けるかと、自然の中から命を頂いて1本の花の美しさをめぐるのだということで、大抵の人は何本も切ることは絶対ない。それはやはり非常

に自然との共生思想の中でできた芸術である。

ものづくりという中で、心的態度の下で、審美的・倫理的な合理性が日本では非常に発達している。だから認知的合理性は日本では駄目だった。ただ、審美的とか倫理的合理性はなかなか端的に、簡単にできるものではないが、認知的合理性は、今の中国を見て分かるように一遍に短期間の勉強で習得できる。勉強すればある程度できるので、日本のノーベル賞だってそうであるし、明治時代に少し勉強したらすぐ認知的合理性では世界のトップに行く。だが、審美的・倫理的合理性はなかなか行かないと私は思っているが、これは少し余計なことである。

そういう意味で、結語を言うと、成長の下でいろいろな行動規範が出てきて、そういうものがいろいろな形で文化的なものに違いが出てきている。あくまで原理論として言っているのであるが。

金融市場、労働市場、財市場におけるグローバル化が加速しているが、金融市場による世界市場の効率化はまさにアメリカが狙っていることだと思うが、日本はやはり自由貿易をやり、ものづくりをやっていくしかないのではないかと思っている。

最後に、残された問題で、この研究会で非常に重要に思っているマクロの問題である。私の考えで言うと、マクロの需要・供給をどうするか。福田委員の長期停滞論、あれはマクロとミクロの両方、需要と供給の両方をバランスよく捉えておられるが、こういう私のような文化的な議論からいくと、需要面で生活様式がどうやって出てくるのかということ、行動規範と密接な形を持って生活様式が出てくると思う。現在の世界では有用な技術の開発が制度化しており、そういう状況では、それに適した技術は自動的に出てくるのだと思う。

人口減少社会に対応した技術進歩が出てくるのだと言われているが、私は、そういう意味では新しい生活様式のほうが基本的に重要で、今日は宮川委員がいないからあれであるが、やはり需要面が重要なのではないかと思う。現在のアメリカ文明の成功は時短とか省力による生活様式を提案したことだと、私はそのようにゴードンが言っていると思うが、その衰退は、新しい魅力的な生活様式が出ていないことによるのではないか。我々が若いころ熱狂したアメリカ文化はその意味でもう魅力を失ってきた。AIは情報面では時短や省力をもたらすかも分からないが、新しい生活様式の提案ではないのだと思う。やはりそこが違うので、これからの世界は生活様式をどうやって提案するかということが基本的な課題になる。これも極論してしまうのだが、生産性はそれに付随していくものではないかと思っている。これは少し雑談のような形で、強いて言えばこのような結論、こういうことを今考えている。以上である。